



玄関横から見た外観

| | |
|------|-------------------------------------|
| 所在地 | 奈良市あやめ池 |
| 工期 | 平成 15 年 4 月～平成 15 年 12 月 |
| 工事種別 | 新築（移築再生） |
| 構造規模 | 木造二階建 延べ床面積 168.39 |
| 主仕上げ | 外部 屋根：ガルバリウム鋼板 外壁：土壁 漆喰塗り 一部杉板張り |
| | 内部 居間 床：杉板 壁：土壁 中塗り |
| | 和室 床：畳 壁：土壁 中塗り |

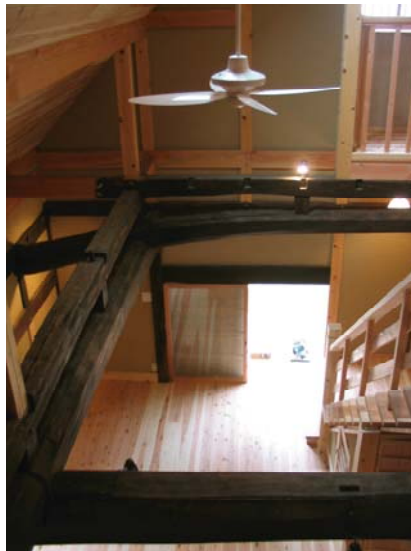


■北集落と土壁下地組

2001年の秋、奈良市内にお住まいのBさんから「日本の古いものが好きだから古材を使った家を建てたい」と古材バンクの会に相談がありました。

最初は「古材の2・3本でも使えれば」とお考えだったのですが、良い材料があって予算内で移築再生が可能ならばやってみたいとの事でした。

同会会員で京都府の美山町で古民家の改修なども手がけられている鶴ヶ岡建築の木村さんが解体した二棟の古材を保管されているという情報を得て、実際に見に伺いました。うち一棟(約100年前のもの)が保存状態も良く、寸法もBさんの敷地に丁度納まるようでしたので、その材を使って再生住宅に取り組む事になりました。



■リビングを上から見る

美山町は京都市内の北に位置し、重要伝統的建造物群保存地区にもなっている北集落を含め、かやぶき民家が数多く残る地域です。

今回再生したのはその美山町でごくごく標準的な大きさの農家です。上棟の前にはご家族と古材バンクの会のボランティアで古材磨きに出掛けたり、竹小舞・荒壁塗りには40人のボランティアが集まったりと、にぎやかに工事は進んでいきました。

また「限界耐力計算法」により、筋交や合板を使わない伝統工法が関西では初めて(新築として)建築確認の許可を得ました。

今回の計画では1階の柱と梁とその組み方はほぼ100%、100年前の農家をそのまま利用し、その間取りを生



■古材が美しいリビングの一角

かしてプランする事により架構の強さを保ち、大工さんの作業量を減らして工事金額を抑えるように努めました。

又、当初は新しい材料には色を塗って、古材に近づけたい、という建主からの要望がありましたが、話し合いの末「色付はいつでも出来るので今はこのままで」という結論に達しました。

リビングに入るとこげ茶色の古材と、白い新材が混ざり合っていて使われている様子が良く分りますが、不思議と違和感はありません。

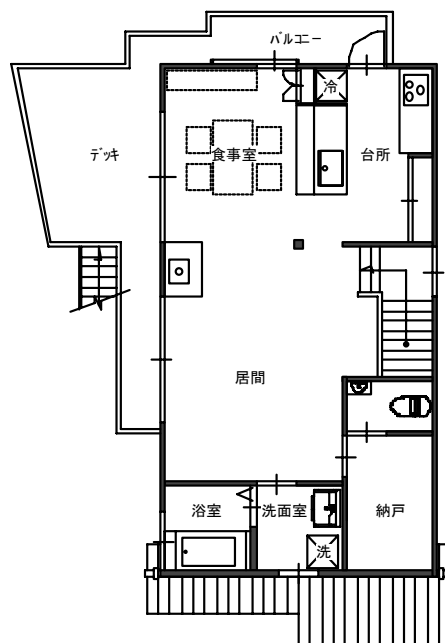
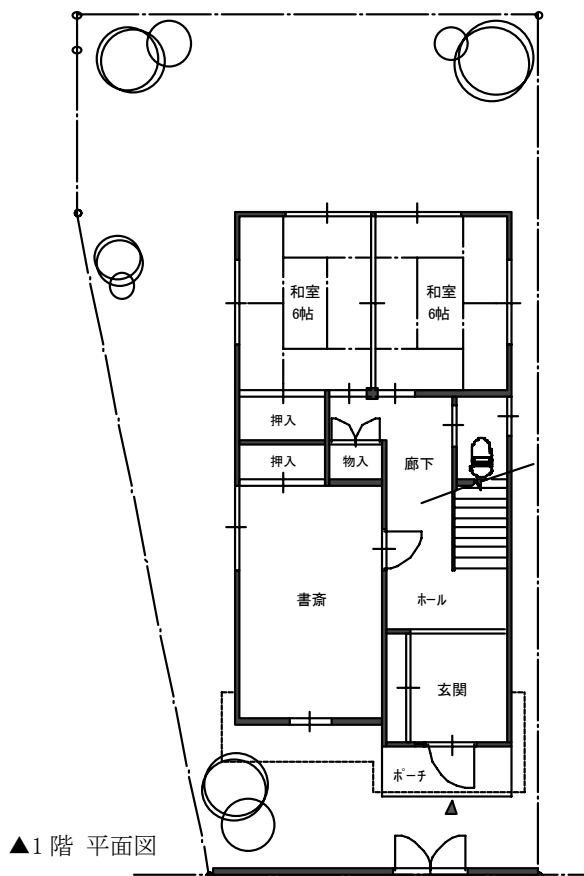
この家が20年ほど経たときに、20年の材料と120年の材料を見比べて、「こんなものかな」なんて言いながら、大らかに暮らして欲しいと設計者は願っています。



所在地 京都市山科区
 工期 平成9年3月～10月
 工事種別 新築（古材の利用）
 構造規模 木造2階建
 延べ床面積 113.71㎡

主要仕上
 外部 屋根：日本瓦葺き
 外壁：土壁下地漆喰塗
 一部 杉板張り

内部 玄関・ホール・
 廊下・食堂・居間 床：桧板、
 壁・天井：漆喰
 和室 床：畳、
 壁：じゅらく塗り、
 天井：竿縁天井
 書斎 床：杉板、
 壁・天井：漆喰塗り
 （壁内に防音シート充填）



家づくりにあたって、「新建材を使わない家、国産材、自然素材、古材を使った家を建てたい」と、というのがCさんの思いでした。

古材の調達先として、古材バンクの会がストックしていたお寺のはね木、野積みされていた元京北郵便局の材を使用することになりました。

汚れた古材に洗いをかける作業は、職人の手間を減らすために、Cさんをお願いしました。

■ 外観



新築から五年の後、年々多忙なCさんは、暖房は薪ストーブのみという生活では無理になったということで、床暖房を入れられました。良い色に変色してきた桧板 (t:27) をそのまま使用したいという希望から、部分的に貼り直す工事でしたが、新しい床材を補足することもほとんど無く施工でき、満足のいくものでした。

▼ 古材をあしらったカウンター



古材は洗いをかけて2階居間の吹抜部の主要な梁組みとして、再利用しました。

内・外部の仕上げは、「自然素材を使って、昔ながらの建て方」と、いう施主のこだわりから、内壁は竹小舞下地に土壁塗り、外壁も木ずり下地の上、漆喰塗りとしました。(大壁仕上げ)

屋根面は、断熱材を使用せず、桧板と杉皮で断熱性を確保し、床材や建具などの仕上げ材も、ムク材を、使用し

塗料も自然系のものにこだわりました。

2階居間の吹抜け、古材を現しにした小屋裏空間は伸びやかで、ダイナミックな印象を与えてくれます。中でも居間中央に立つ柱は古材店で求めたケヤキの古木で、太すぎるため削り落とした端材を玄関ドアのはめ板にも利用しました。雨の中京北町より引き上げた材も、外部の塀に利用したり、ストーブの薪小屋の材として利用し、材の有効利用を心がけました。

その他にも、古い舞良戸を食器棚や物入の扉にしたり、スス竹や古い欄間等をアクセントに利用したところもあり、新旧の材が調和し、みどころの一つになっています。照明器具も施主自らアンティークの店で求めた物で、その都度職人たちと細部にわたる打合せをしながらの工事でした。

▼ 居間より小屋裏吹き抜けを望む

